巻/頭/言

時代の要請をともにいち早く実用化する

Collaborate to Realize Prompt Practical Implementation of the Demands of the Era

小田川和男
Kazuo Odagawa

三菱一号館が2009年4月に復元される。1894年（明治27年）12月，現在復元工事中の場所に丸の内オフィス街の第一号館として建設された。建物規模は，地下１階・地上３階・軒高15.2m（50尺）・建坪1,355m^2（410坪）と，今日の本格的な事務所ビルに比べ小さい。三菱一号館が竣工した当時，建設地周辺には電気の供給はなく，ビル設備も，照明として利用したガス灯があった程度である。したがって，執務空間に対する要求は，今日のような奥行きのある広い空間ではなく，窓からの採光を利用する奥行きの狭い空間作りが基本であった。自然エネルギーを利用するデザインであったともいえる。

しかし時を経て，広い空間を持つ事務所ビルが求められるようになり，それにこたえるように建築・設備技術が発展し，建物の高層化と，巨大な無柱空間が可能となった。建物内の照明はガス灯から電灯へ，さらに電気エネルギーは動力の利用へと用途が広がった。これらの変化は，常に利便性と安全・安心が求められてきた結果であろう。

我々設計事務所は，発注者である顧客の要望・要求を最優先に考えながら，建物とそのシステムの設計を行うが，昇降機をはじめビル設備は，建物の機能・快適性などを左右する重要な役割を担っている。通常の場合，設備機器についてはメーカーの提供する製品を前提に設計する。建物関係のメーカー製品は，建築設計のように，個別オーダーメードではなく，不特定多数の利用者を前提とした既製の汎用的機器製品を使用することが多い。しかし，顧客からの要望は時として，通常提供される製品にはない機能要求を伴うことがある。ギネスブックにも掲載された，“超高速”で，“もの静かな”横浜ランドマークタワーのエレベーターの例などはその典型例と言えるが，こういったことはいろいろな領域で求められる。そういった場合でも，これまでも，メーカーと我々は品質，コスト，納期など，ものづくりの基本思想を共有し，技術集団の知恵と努力で，プロジェクトを成功に導いてきた。

こういった共働の認識，思想そして努力が安全で快適かつ顧客要望に対応した建物をつくる力の根底をささえてきた訳だが，特に近年はこれに加えて“環境”に充分配慮した建物，街づくりを共にしてゆかなければならないという思いを一層強くしている。100年という単位で建築の寿命が考えられるようになり，それに伴い建物の寿命とは異なるビル設備の寿命は，期待寿命に加え要求の変化に対応するための更新が不可欠になり，ライフサイクルという視点とともに環境機能・効率アップという視点がますます重要になってきた。

建物・建築設備に対する時代の要求はありとあらゆる面で求められている。このことは建築関連の素材についても言える。明治の建物の構造材はレンガであった。今日，主要構造部材は鉄とコンクリートへと変遷している。しかし，建築資材は今，現実的な問題として資源の争奪と価格の高騰が起きている。ビル設備でも，鉄や銅をはじめとする基本的素材が多く使用される。従来型の，設計では既存の素材を前提としたものになりがちであるが，素材そのものから見直した設計への転換が必要になる可能性がある。さらに，使用エネルギー効率からの視点では，白熱電球から電球型蛍光灯への転換，さらに照明光源へのLED採用例のように，様々な分野でかつかなりのスピードで，進行するであろう。

今，社会は変革の時期にあり，ものづくりのあり方自体，変化が求められている。その変化に対応し，さらに一歩先を見たものづくりの思想を共有して，ともに進んでゆきたいと考えている。

◆㈱三菱地所設計　取締役社長　　President, Mitsubishi Jisho Sekkei Inc.